

■ 読者投稿欄

大阪大学基礎工学研究科 菅 滋正教授2008年ヘルムホルツ・フンボルト研究賞受賞

曾田一雄 (名古屋大学大学院工学研究科)

菅 滋正教授(大阪大学大学院基礎工学研究科)は、日本人として初めてドイツで最高の栄誉あるヘルムホルツ・フンボルト研究賞を受賞された。同賞は、ヘルムホルツ協会とアレキサンダー・フォン・フンボルト財団とが共同選考の形でドイツ国外に在住する国際的に著名な現役研究者に授与してきたもので、人文科学から自然科学の全分野において後世に残る傑出した業績を挙げた研究者に与えられる。今回の受賞は、菅 滋正教授1名のみであり、15人目となる。同賞の授与式は年2回行われるが、菅 滋正教授は、フンボルト賞受賞者30名とともに、6月24日にベルリンで表彰された(写真)。

菅 滋正教授は、1970年代半ばから東京大学物性研究所軌道放射物性研究施設の初代専任助教授としてSORRINGと原子核研究所電子シンクロトロンを用いた放射光の全国共同利用を推進し、1980年代末に大阪大学教授に着任後は、文部省高エネルギー物理学研究所の客員教授としてPFならびにARでの研究を推進した。1990年代半ばからの大型放射光X線光源SPring-8の建設に際しては、ビームライン検討委員会の初代委員長としてビームライン建設計画の具体化に貢献した。また、軟X線分光グループの中心として、今日でも世界最高性能を誇るビームラインBL25SUの分光系から実験系までを一貫して設計・建設・立ち上げし、世界的共同利用を推進した。同ビームラインはその後もJASRIビームライン担当者の手で世界最高性能を維持している。

研究業績としては、SPring-8のBL25SU軟X線放射光を用いて電子間相互作用の大きな強相関固体のバルク電子状態を光電子分光の手法で世界に先がけて解明したこと、それまで不可能とされてきた軟X線角度分解光電子分光にも世界で初めて成功し、強相関電子系のバルク3次元フェルミオロジーという分野を創設したこと、さらに、SPring-8のBL19LXUやESRFあるいはBESSYを用いた高いエネルギーでの硬X線光電子分光(HAXPES)や共鳴非弾性X線散乱(RIXS)の研究で世界的に注目され

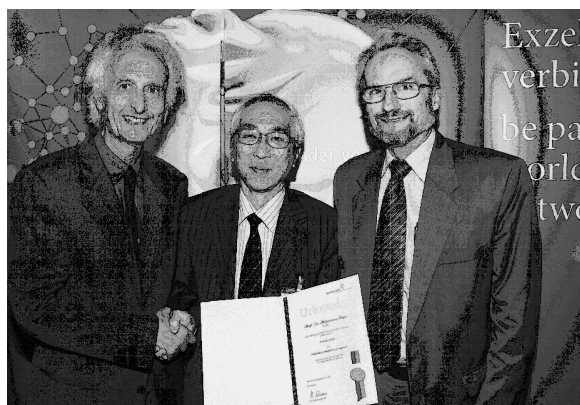


写真 右からヘルムホルツ協会 Director Prof. Dr. Michael Steiner氏、菅 滋正教授、アレキサンダー・フォン・フンボルト財団 President Prof. Dr. Helmut Schwarz氏。

る研究を続けていることなどが上げられる。これらの研究の多くは、菅 滋正教授の発想に基づくが、常に次世代を担う国内外の若手研究者の参加をはかり、研究分野の国際レベルでの発展と交流をはかってきた功績は諸外国から高く評価されている。同教授はさらに内殻吸収磁気円二色性分光(MCD)や磁気円二色性を用いた光電子顕微鏡(PEEM)によるマイクロ・ナノ磁性の研究などの放射光分光研究を広く推進してきた。また、分光研究にとどまることなく、常に新しい計測手法の開拓や新しい学問分野の開拓にも情熱を注いできた。わが国が立ち遅れているナノ磁性研究の切り札と考えられているスピン偏極走査トンネル顕微鏡(スピンSTM)についても菅 滋正教授は国際共同研究として着実に研究成果を上げている。

ヘルムホルツ・フンボルト研究賞では、受賞者にドイツの研究機関とのプロジェクト研究の推進が期待されている。菅 滋正教授には、強相関電子系とナノ磁性の分野において今後ますます活躍されることと、心からお祝い申し上げます。